

2. デイサービスにおけるプログラムを効果的にするためにスタッフが行っているサポート

杉原久仁子

1. 目的

プログラムを効果的にするために、スタッフはケアの場面で利用者に対してどのようなサポートをしているのかを明らかにし、若年性認知症や初期の認知症の人を対象にしたデイサービスプログラムにおいて、必要とされているサポートを検証することを目的とする。

2. 対象

デイサービスかみやま倶楽部を利用している若年性認知症の人、初期の認知症の人及びスタッフ

3. 調査期間 2013年8月20日～2014年2月28日

4. データ収集方法、分析方法

かみやま倶楽部での参加観察を行った。参加観察では、1回につき1日または半日、利用者に関わる場面では自然な形で関わりながら観察を行った。その結果をエピソード記述し、フィールドノート（記録）にまとめデータとした。

収集したデータは、「プログラムの中でのスタッフが行っているサポート」の視点で、サブカテゴリーを作り、プログラム毎に整理した。プログラムは、15プログラムに分類し、それぞれのプログラムの特徴は表1に示した。サブカテゴリーから、さらに前後の状況や別の場面との比較検討によりカテゴリーを抽出した。

個人が特定できないように、利用者はアルファベット大文字のA、B、C・・・、スタッフは小文字のa、b、c・・・とした。

5. 結果

分析の結果、若年性認知症や初期の認知症の人を対象にしたデイサービスプログラムにおいて必要とされているサポートにおいて、52個のサブカテゴリーと8個のカテゴリーを抽出した。

若年性認知症の初期の認知症の人のデイサービスにおけるプログラムには、活動的、仕事の（作業・役割）なプログラムを行うことが望ましいが、そのプログラム実践においては、以下のサポートが必要であった。

若年性認知症の人や初期の認知症の人は、サポートがあれば行えることが多い。そのため、【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】は、作業プログラム、楽しみのプログラム、定例のプログラムすべてにおいて行っていた。そのために本人に情報を届ける【情報の伝達におけるサポート】や、【参加するためのサポート】を行っていた。プログラム参加のためのサポートは、特に前頭側頭型認知症の人の症状に対応したサポートを行っていることが特徴的である（繰り返しの作業、集中が切れたときの声かけなど）。アルツハイマー型認知症の人には【記憶障害の補助サポート】や【自信を回復するためのサポート】などが特徴的である。記憶障害の補助方法としては、利用者自身が自分で補うセルフサポート（メモをとる、名札づくり）や、スタッフが行うサポート（声かけ）、残された記憶

を活かす（手続き記憶）プログラムの工夫を行っている。プログラムの中には【本人の気持ちを引き出すためのサポート】を駆使しており、コミュニケーション技法の工夫や、利用者の気持ちを聞く場づくりをおこなっていた。

かみやま倶楽部でのサービスでは、散歩や外出を多く取り入れているが、外出時の【リスクを回避するためのサポート】は、単に車などの障害物から守るだけでなく、刺激の多さから守るような精神的なリスク回避も行っていった。

かみやま倶楽部の利用者は、50～60 歳代の男性が多いことから、【仲間づくりのためのサポート】も意識して行われていた。

次に、各プログラムのサポート内容をまとめてみた。

①のしをはがす作業

のしを剥がす作業はイレギュラーな作業であったが、多くの利用者が積極的にかつ集中して行っている。作業の特徴として、①全体の流れが目に見え、②単純でわかりやすく、③繰り返しの作業であること、④流れ作業の分担部分を責任もって行える、⑤作業の内容が違うので、疾患別の障害特性に対応できるなどがその要因となったのではないだろうか。繰り返しの部分は前頭側頭型認知症の「常同性」に対応し、わかりやすい内容も言葉で説明がなくても作業にとりかかりやすかった。作業に意欲を持って取り組む人にとっては、「自分の作業を終えて、次の段階の作業」に移ることも可能であり、さらに積極的な姿勢で自ら取り組めることとなった。前頭側頭型認知症の「自発性の低下」に対して、スタッフが「強制とならない声かけ」や無理をしない誘いかけをしていることもポイントである。結果、その利用者は作業中に自分のことを褒められても何も返答せず、黙々と作業を行った。またデイサービス利用中に家族のことが気になる利用者も、作業中は気にならなかったようだ。

仕事をしたいと思っている 50 代、60 代の男性利用者にとって、数時間であるにせよ、「仕事」に取り組む姿勢に真剣さや、積極性が表現されたといえる。

②切手を切り取る作業

切る部分がはっきりわからないものは、切る部分に赤線を入れ、スムーズに行える工夫をしている。はさみを使い、切手を切る作業は空間失認のない前頭側頭葉変性症の人に適している作業であるかもしれない。立ち去り行動や時刻表的行動が顕著で集団生活になじめないと言われ、通所サービス利用を中断される人も多いが、当事業所では、スケジュール表や作業専用場所の設定など視覚的にわかりやすい「構造化」を取り入れ、「どこで」、「いつ」、「何を」、「どのように」をわかりやすくしている。「立ち去り行動」が出た場合でも、声かけなどで作業の継続ができていく。その結果、作業に集中するだけでなく、他者との共同作業も可能であることがわかった。前頭側頭型認知症の人には環境を整えるサポートが重要である。

③名札づくり

記憶障害などの認知症の障害をセルフサポートしていくことは、若年性認知症の人の活動においては重要である。特に記憶障害は、高次脳機能障害の人のメモリーノートに見られるように、比較的セルフサポートしやすいものである。例となる場面では、スタッフの顔と名前が覚えられないことをスタッフなどの他者がサポートするのではなく、自分で自分のサポートツールを作り、結果、自分以外の人にも役立つというものである。はさみで型を切るときに、目安になる線を自分で引き、その線通りには

さみで切るということも、できないことに対して行うセルフサポートである。

作業中に家族の存在があると、頼ったり、遠慮しがちになるので、作業プログラムではできるだけ家族と離れておく方が望ましい。

④掃除

掃除は、雑巾をもつとスムーズに拭くことができ、棚の上の障害物を動かして拭くなど今までの生活経験が活かしている。しかし、記憶障害により、一度拭いたところを覚えていないので、近くで見守りながら、拭く場所を伝えていくサポートが必要である。

掃除機は、持ち構えることはできてもスイッチを押すという操作がわからなかった。言葉だけでは、スイッチが伝わらなかったため、同時に視線でもスイッチを伝えると、スイッチを入れることができた。雑巾がけと同じく、スイッチが入ると、スムーズにかけることができる。また何度も同じ場所を吸っているため、これも吸った場所がわかる工夫が必要である。掃除機を使っている間は、コンセント線の長さや人の動きに注意がいかないので、注意力の低下に対してはスタッフが確認していく必要がある。

⑤その他の作業

若年性認知症の人の「働きたい」を実現できるのが、仕事の作業プログラムである。例となる場面は、利用者が以前行っていた「布の裁断」とほぼ同じ内容の作業もあがっている。その作業にとりかかると、利用者は日課である散歩の時間も忘れて作業に集中していた。また、前頭側頭型認知症の人ができる「はさみで切る」「並べる」をうまく取り入れた作業も行っている。棚の組み立ては周囲にもわかりやすい大きな作業であることから、他者との協働作業や意見交換が可能であったと推測できる。コーヒー好き F さんのために、コーヒーを淹れる場をセッティングしてみたが、初回は「淹れる方法」が F さんのイメージしていた方法と違っていたために、F さんは戸惑っていた。しかし、1週間後に F さんの「淹れる方法（豆から）」でセッティングすると、コーヒーを淹れることができ、そのコーヒーを飲んだスタッフを見て F さんは満足している。単に「以前やっていたから」「好きだから」というだけでは、本人の「できる力」が発揮されないこともある。「何を」「どのように」できるのかをアセスメントしていくことが大切である。また、この事例のように、1回やってみて無理だとスタッフがあきらめるのではなく、どうすれば利用者が「できる」のかを考え方や場を修正していくことが重要である。

以上のことから、作業プログラムは、①仕事の ②道具を使える人には道具を使ってもらう ③周囲にもわかりやすい大きな作業などはその人の活動への意欲を高め、他者の協力も得やすい ④本人の「やりたいこと」が「できる」ために十分なアセスメントとセッティングが必要なことが考えられる。

⑥アートワーク

アートワークは、その人に合った手法を用いて作品を作る。本人の障害特性や意欲、経験などに応じた個別対応が必要なプログラムである。作品作りの中では、各疾患による障害特性が顕著に表れてくる。特に、前頭側頭型認知症の人の「こだわり」ともみられる常同性、規則性などを否定することなく作品作りを進めていくことが大切である。

各作品についての手法はあらかじめ、進行役によって示される。その手法に基づいた方法を、利用者が選ばなかった場合の臨機応変な対応がスタッフに求められるが、他方で作品の完成を目標とする作業であるため、スタッフが完成を意識しすぎると、「利用者の選択」を認められない対応になるので、注

意が必要である。

前頭側頭型認知症の注意維持困難や、アルツハイマー病の「空間失認」により、前で進行役が手法の説明をするだけでは、本人に伝わらないこともあるので、サポート役は、本人の手元での作業手法の説明も必要である。また質問方法では、クローズドクエスチョンが適切であるが、感情に乗った内容であれば、「ことば」が出てきやすい場面もあり、スタッフは本人の感情を捉え、表現できるような場面づくりを設定することが求められる。

効果としては、回を重ねることで、アートワークへの慣れ（雰囲気、場面）が生じ、次第に集中できていくことがわかった。「絵を描く」ということを「幼稚」だと否定していた利用者は、幼稚だととらえていた一方で、自信の無さも持っていたと考えられるが、その利用者も回を重ねていくうちに楽しむことができている。記憶障害があっても、自分の作品は認識でき、また「100点満点」だと自分で認められることは認知症の本人にとって貴重な体験である。多くの若年性認知症の人は、記憶障害や失行などによってできないことが増えていき、自信を喪失してしまいがちであるが、作品づくりによって満足感を得られることで、自信回復へつながっていくことも考えられる。

⑦卓球

手続き記憶とは、「一定の認知活動や行動に組み込まれている記憶」である。認知症になっても手続き記憶は残存されていることが多い。身体で覚えている卓球はラケットを持つと、意識することなくボールを打ち返すことができる。そこには、複雑なルールもなく、身体が自然と動くままにまかせていけば、相手との勝負を楽しむことができる競技である。また、テニスと違い、参加者のすぐ近くでスタッフや他の利用者が見守っていることもポイントである。飛んで行ったボールを「ごめん」と言い、拾いに行く場面や、他者の試合を見て「上手だね」と称賛しあう場面も見られている。卓球を楽しむことで、身体の活性化とともに、試合相手とのコミュニケーションや役割なども楽しむことができ、身体機能が維持されている若年性認知症の人には、適しているスポーツである。

⑧楽しみ

歌は、認知症があってもその障害に左右されず、楽しめるものである。歌唱時に大きな声を出すことは、本人も気持ち良いことでもあり、他者とも一体感を持てるプログラムである。完成品を自宅に持ち帰れるものも、利用者にとっては満足感を感じるためのプログラムである。過程においてスタッフが隣で行動で示すなどサポート方法には注意が必要である。将棋は、本人がやりたいようにというのが基本であるが、記憶障害のサポートが必要であった。

⑨談話

何気ない時間において利用者同士の交流やスタッフに対する信頼感などが抽出された。利用者間ではふざけあい笑いあう場面などがみられ、共通した話題でもりあがっている。お酒の話題では、スタッフなどが間に入らなくても利用者同士で話が盛り上がる時もあった。ふざけあいやお酒の話などは、同世代、同性同士だからできるということもあるのではないかと。スタッフに病気への受け入れを語るなどスタッフへの信頼感のあらわれとみてとれる利用者の行動や、スタッフにコーヒーを淹れたり、肩を揉むなどの行動もあり、スタッフと利用者の良好な関係がみてとれる。そういったことが、場に対する安心感にもつながり、ソファでうとうとできるような安心した行動に変化していくと思われる。また言葉

がなかなかでない利用者はスタッフの問いかけを目くばせで周囲に振っており、場の雰囲気を作っていた。プログラムとプログラム間の空白と思える時間こそが、利用者と他者との人間関係を親密にしていることが読み取れる。

家族の存在は、プラスにもマイナスにもなっている。「帰ろう」という利用者は、家族が楽しんでいる姿を見て、その場にとどまろうとしている。一方、別の利用者は家族がいない方が発言回数が増すとの観察がある。デイサービス活動中の家族の存在は、利用者の活動性を左右する要因にもなっている。

⑩散歩・外出

外出プログラムは、①いつもの集団とはちがう新しい人との出会い ②季節感を感じ、「見る」「さわる」ができる ③視野に入る物を題材に会話のきっかけができるなどの特徴がある。また、先に歩いている人が後の人を信号で待つ行動や集団の最後から集団を見守るように歩く行動、車から他者を守る行動は、集団の連帯感のあらわれである。認知症を発症しても、すべてのことができなくなるわけではなく「人を守る」という優しさなどは外出先などでは特に表に顕著に表現されている。帰属意識を感じている集団が、外出という非日常的な場におかれたとき、集団への意識とそれぞれの役割がよりはっきりしてくるのかもしれない。

前頭側頭型認知症の人は散歩プログラムを定例化しているが、特に注意している点は、時間の約束を利用者で行っていることであった。疾患特性である時間割的行動をうまく取り入れているが、時間を区切ることによって、際限なく歩くということを回避できていた。人によっては、初めてのところに不安を覚えたり、一度行っても記憶がない場合もあったが、一人で離れてもまた元いた場所に戻って来れる人もいた。

前頭側頭型認知症の人は歩行スピードも速く、前へ前へと歩いていくので、車などへの注意喚起ができなかったが、会話をしながら歩くことで、横並びのスピードを保つことができていた。

外出は集団行動が求められるため、目的を作っても自分の目的が果たせないこともあるので、そこはスタッフの十分な計画と準備が必要である。

外出するメンバーの希望をとって行う場合は、スタッフが予想していたメンバーと違った集団になるかもしれないが、その時はその場で編成を変えるなど臨機応変な対応が求められる。

前頭側頭型認知症の人は、一般的に他者との関わりを結ぶことが難しく、予定変更にはなじめないと言われているが、事例では、「一緒に行ってや」と誘ったり、他者の提案を受け入れ、行動の変更ができていた。これは、安心と居心地の良い集団の中で過ごすことで初めて可能なことではないかと推測する。

⑪外食

外食は何と言っても自分で食べたいものを選べることが特徴である。スタッフは利用者が選びやすいように二者択一の方法で選べるように工夫をしている。外食先では、社会的ルールに沿った行為が求められるが、事例では持参した額より高額注文をしてしまったことに利用者自身が落ち込む場面があった。

施設外の開かれた社会の中では、常識と違う行動をしてしまと、周囲から見られて恥ずかしい、もしくはプライドが傷つくということが予想される。そんな時に、行動から読み取った声掛け誘導や、できる限り手は出さず見守りに徹するなどの配慮がスタッフに求められる。

また店内の客数が多くなるとともに、聴覚や視覚の刺激も増し、本人にストレスになることもあるが、

飲み物を飲んで落ち着いてもらうことや、「〇〇まで待ってください」と店内にいるのは〇〇までと時間をはっきり明治する必要がある。

⑫調理

料理には手続き記憶が活かせる作業が多く含まれているので、セッティングさえすれば、利用者が積極的に行える部分がある。そのことで、役割を担う満足感を感じることができる。経験がないことでも行えているのは、おそらく「食」に関する内容なので、出来上がりがいいイメージされているのではないだろうか。また、料理の作業一つひとつは複雑ではないので、順番がわからなくても言われた内容の部分のみを行うということも可能である。流れ作業は数人で分担して行うこともできるので、複数で順番に担当を決めてやることも方法である。作業を依頼するとき、作業部分の全工程だけでなく一工程のみ依頼するとか、目の前で具体的に説明するなどの工夫が求められる。

⑬昼食

昼食やその後の歯みがきは毎日のことだが、毎日同じ支援方法が適切というわけではない。例となる場面では、利用者がその日の朝、回数券を落としたというエピソードがあり、元々調子が悪いのか、回数券を落としたことに落ち込んでいるのかわからないが、朝から表情も暗かったということである。その日の調子によってサポート内容を柔軟にすることが必要である。食事の準備や後片付けでは、サポートをすれば行うことができるので、スタッフは細かいサポートをしている。また食器の工夫次第では、一人で最後まで食事をするのが可能であった。こういった方法であれば、自分でできる限り行えるのかを常に考えていく必要がある。

前頭側頭型認知症の人は、集団生活が苦手な一面があり、他の人を待てなかったり、自分だけ先に食事をするようなところも見受けられた。しかし、同じ人が別の時には、他の人を待てるということもあった。昼食以外においても、前頭側頭型認知症の人が集団とのかかわりをする場面もあるので、やはり環境設定と本人の納得が必要なのではないかと思われる。

⑭朝の会

利用者自身ができるだけ自分できるようにサポートをしていることが特徴である。例えば、血圧測定を自分で腕を差し込み、説明を聞きながら測定できる機器を採用していた。また利用者が机を取り囲んで座る前方にホワイトボードを置き、その日に話し合う内容を大きく書いている。ホワイトボードに張り付けた A3 サイズの大きさの紙にも本日の予定を書いていくが、それは保存可能なので、毎日の記録の蓄積にも使っていくことができる。この内容は、利用者間の情報共有にもなり、記憶の補助手段としても使われ、各人が個人のノートにメモしている。

利用者全員が顔を合わせると、日付の確認や参加者の自己紹介を全員で行う。日付確認は習慣になっており、問われるとすぐに回答する利用者もいる。自己紹介については、言葉が出てこない利用者について言葉を想起させるようなサポートを行っている。

一日のスケジュールについて、昼食、やりたいことなどを利用者も含めて決めていく。決まったことは、先の A 用紙に書いていく。料理については、料理の材料を利用者で意見を出し合うが、主婦であった人は積極的に意見を出している。全体で何か一つのことを話し合う時に、一斉に投げかけただけでは、各人に情報が届かないことがあるので、スタッフは全体に投げかけた後、個人個人にあった質問方法で

意見を導いている。また、利用者本人が判断できるための情報を伝える工夫を行っている。

利用者の中には、意図性と自働性の乖離があり、意識しないで話す場合には言葉が出てくるが、集団の中で「話しをしよう」という時になると、言葉が出てこない人もいる。できるだけ顔なじみの関係を作り、本人が緊張しないで話しができる関係づくりが必要である。

前頭側頭型認知症の人には、その日の行動スケジュールなどを書いた用紙を用意しておく、それに基づいて朝からの行動を自ら組み立てることができている。

⑮振り返りの会

振り返りの会では、全員が一日の感想を述べ合ったり、各人がその日に行ったことをノートに記入して記憶のサポートを利用者同士で行っている、一日の感想で肯定的な感想が出た時は、デイサービスでの活動が良い印象に終わり、次もまた来たいという気持ちにつながる事が予想される。感想を聞くときのタイミングや集中のポイントをはずさないことや写真を使った視覚的な工夫も必要になる。

6. まとめ

若年性認知症、初期の認知症の人のプログラムでは、セルフサポートができるためのサポートが必要であり、また本人が自信を回復できるもの、仲間づくりを意識したプログラムを行うことが有効である。そのためには、認知症の原因疾患を理解し、症状を考慮したサポートを行うことで、プログラムに参加し、本人たちが自分たちでできることが多くなると思われる。

表1 カテゴリーを抽出したプログラム

		プログラム	内容	頻度
作業プログラム	①	のしをはがす作業	段ボールに入っている袋の「のし」を剥がす作業	イレギュラー
	②	切手を切り取る作業	使用済みの封筒の切手を消印も含めて切り取る作業	不定期
	③	名札づくり	名札の大きさに合わせて紙を切り、名札ケースに入れる	不定期
	④	掃除	雑巾がけ、掃除機で掃除を行う	不定期
	⑤	その他の作業	棚の組み立てをする、コーヒーを淹れるなどの作業	不定期
楽しみのプログラム	⑥	アートワーク	絵画的技法を用い、作品を作る	定期（週1）
	⑦	卓球	事業所に常設している卓球台を使っている	不定期
	⑧	楽しみ	歌、将棋、バルーンアートづくり	不定期
	⑨	談話	プログラムの合間の室内での談話	毎日
	⑩	散歩・外出	散歩や車を使つての遠出	毎日
定例のプログラム	⑪	外食	昼食を近隣の飲食店に出かけて食べる	不定期
	⑫	調理	室内で、餃子たお好み焼きなどを作って食べる	不定期
	⑬	昼食	室内でお弁当を食べる、その後の片づけなど	毎日
	⑭	朝の会	バイタル、本日の予定の話し合い、体操など	毎日
	⑮	振り返りの会	一日の感想を話し合い、その日の記録をノートに書く	毎日

表2 若年性認知症や初期の認知症の人を対象にしたデイサービスプログラムにおいて、必要とされているサポート

【 】 カテゴリー	< >サブカテゴリー	例となる場面の概要	プログラム
【情報の伝達におけるサポート】	<作業の目的や流れを説明する>	・最初に作業の目的や全体の流れを説明する	・のしをはがす作業
	<全体への説明と個別への説明を行う>	・作業方法を全体に伝えた後、身近にいるスタッフがが必要な場面において個別に説明する	・アートワーク
	<情報を伝える方法を個人ごとに変える>	・昼食はどうするかというスタッフからの全体への問いかけに利用者から反応がなかったため、一人ひとり質問方法を変えながら聞いていく	・朝の会
	<判断するための情報を伝える>	・弁当購入であれば選択肢はたくさん増えるなどの説明や、マップがあればそれを使いながら、“ここのお弁当屋さんには、このようなお弁当が置いている” ことなどを示す	・朝の会
	<1日のスケジュールを伝える>	・時刻表的行動を行う利用者には、あらかじめスケジュールを書いた紙を見せ、予定をわかりやすくする ・時間の約束をすることをプログラムに入れる	・切手を切り取る作業 ・朝の会 ・散歩・外出
	<その日の予定を全体で共有する>	・その日の予定を、利用者とどうするか相談しながら決め、前に貼っている紙に書いていく	・朝の会
	<言葉で伝わらない時は視線や動作で伝える>	・スイッチと伝えても伝わらない時は、視線や動作で伝える	・掃除 ・楽しみ ・調理
【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】	<本人ができることをやる場を設定する>	・利用者が何ができるかを見つけ、声かけ（依頼、誘導）や機器の利用で自分でできるように場を設定している。またできない時には、方法の修正を検討している ・昼食後の片づけを誘導しながら利用者と共に行う	・アートワーク ・その他の作業 ・朝の会 ・昼食
	<日課（習慣）に定着させる>	・切手を切る作業や朝の日付確認など習慣になっていることは、自発的に行うことができている	・切手を切り取る作業 ・朝の会
	<手を出さないで見守る>	・外食時、本人に難しい動作であっても、手を出さないで見守る	・外食
	<本人のやり方を否定しない>	・前頭側頭型認知症の人の特徴的な症状による作業へのこだわりを否定せず、本人のやり方で行うようサポートをする	・アートワーク

	<その日の体調に合わせ支援内容を変える>	・混乱が多い時には、支援内容を増やしている	・昼食
	<道具を使う>	・空間失認のない利用者には、はさみを使う作業を取り入れている	・切手を切り取る作業 ・その他の作業
	<作業専用の場を作り、事前に本人に伝える>	・作業専用のスペースを作ると、時間になったらその場で移動して作業ができる	・切手を切り取る作業
	<食器の工夫>	・底の深い皿だと、すべて自分で食べることができる	・昼食
	<計画立案に利用者が参加する>	・調理の材料を利用者たちが決めていく	・朝の会
【本人の気持ちを引き出すためのサポート】	<クローズドクエスションを利用する>	・感想を「どうですか」と聞かれると、「よろしくお願いします」とその場にあわない返答が返るが、選択的質問だと回答できる ・昼食に何が食べたいのか選択的質問を利用している	・アートワーク ・外食
	<感情を伴う言葉を引き出す>	・あらたまつての質問ではことばは出てこないが、嗅覚や視覚を利用して感情が伴うと言葉が出る ・顔なじみの人との挨拶はスムーズに出る	・アートワーク ・朝の会
	<行動から本人の言いたいことを推測する>	・外出先で到着したばかりなのに靴を履いて出て行こうとされることからトイレに行きたいと推測する	・外食
	<くつろげる場所で隣に座り、心境を聞く>	・ソファで隣に座り、利用者の病気についての気持ちなどを聞く	・談話
【記憶障害の補助サポート】	<メモによるセルフサポート>	その日の予定や記録や覚えておきたいこと、目標などをノートにメモする	・アートワーク ・朝の会 ・振り返りの会
	<セルフサポートのためのツール（名札）を作る>	・顔と名前が一致しないという利用者のために、名札を作ることにし、利用者と共に作成する	・名札づくり
	<写真を使って振り返る>	その日に行った場所を忘れていたが、写真を見るとき思いだし、肯定的な感想を伝える	・振り返りの会
	<手続き記憶を活かす>	・墨をすること、卓球、など身体で覚えていることは細かいサポートをしないで利用者が楽しめるようにする	・アートワーク ・卓球 ・掃除 ・調理

	<p><声かけで記憶障害をサポートする></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・雑巾を拭く場所、掃除機を当てる場所を声かけで伝え、同じところを何度も掃除しないようにする ・自己紹介の時、「〇〇さんは△△が好きでしたよね」と話のきっかけを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・掃除 ・楽しみ ・朝の会 ・振り返りの会
	<p><その日の1日を振り返り、良い印象で終える></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・その日の感想を笑顔で話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りの会
【自信を回復するためのサポート】	<p><自分を認めることができる気持ちを引き出す></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・完成した作品に満足し、その気持ちを引き出す場を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・アートワーク
	<p><できないことを自分で工夫してできるようにする></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・はさみで切る線がわからない時は、自分で物差しで線をひいたり、折り目をつけて、その上をはさみで切る 	<ul style="list-style-type: none"> ・名札づくり ・その他の作業
	<p><役割を作る></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コーヒーを淹れてもらい、スタッフが飲む 	<ul style="list-style-type: none"> ・その他の作業 ・調理
	<p><同時作業を求めない></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートにメモしながら、発言すると、言いたいことと違うことを発言してしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りの会
	<p><回数を重ねていく内に本人の変化がある></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム回数を重ねていくうちに、家族への依存態度が減ったり、スムーズにプログラムに参加することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・アートワーク
【参加できるためのサポート】	<p><繰り返しの作業を取り入れる></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ作業を最後まで繰り返し行うことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・のしをはがす作業 ・切手を切り取る作業
	<p><他者と同じ動きができるように声かけし、場を作る></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・何をしてもよいかわからない利用者に「こちらに来て同じように」してほしいと声かけをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・のしをはがす作業
	<p><作業の流れや成果を視覚的にわかりやすくする></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のやっている作業が終われば、前後の流れを自ら手伝えるようにグループ分けをしておく 	<ul style="list-style-type: none"> ・のしをはがす作業 ・調理
	<p><隣で作業を手伝う></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・隣に座って作業を手伝うと集中できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・のしをはがす作業
	<p><作業のルールを視覚的にわかりやすくする></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・はさみで切る線に赤線を引いてわかりやすくする 	<ul style="list-style-type: none"> ・切手を切り取る作業
	<p><集中が切れた時に声をかける></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の集中が切れた頃に声かけをすると作業を継続できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・切手を切り取る作業

	<プログラム時の家族の役割>	・作業プログラムや何か決める時に家族がいると、利用者によっては家族に依存する傾向があるが、談話のプログラムだと、家族が共に楽しみ、家族の存在はプラスに働いている	・名札づくり ・談話
	<仕事の活動を取り入れる>	・利用者が以前行っていた仕事と同じような内容をプログラムに導入する	・その他の作業
	<自発性の低下に対する声かけ>	・依頼する内容で声をかけ、プログラムに関わってもらおう	・のしをはがす作業
	<季節感を感じ、「見る」「さわる」ができる>	・もみじを見に行き、葉を拾う	・散歩・外出
	<予定外への柔軟な対応をする>	・外出しない予定の利用者が急に外出希望を出した時、編成を組み直す	・散歩・外出
【仲間づくりのためのサポート】	<他者との協働作業>	・流れ作業を行ったり、1つの作業をやるときに利用者自身が他の利用者に意見を聞きながら行う	・のしをはがす作業 ・その他の作業
	<他者との関わり>	・プログラムを通して他の利用者を褒めたり、他の利用者に謝るなどがみられる	・卓球
	<集団の連帯感>	・散歩に出ている時、遅れる利用者を待つ、最後を歩いてみんなを見守るなどの行動を利用者がとる	・散歩・外出
	<集団から離れている人にもプログラムの輪の中に入れる>	・離れているところにいる人にも一緒に行うプログラムを勧めている	・楽しみ
	<話題づくりの工夫>	・利用者の故郷の話、男性同士の酒の話などもりあがる ・外出先で目にするものを取り上げて会話をする	・談話 ・散歩・外出
	<非言語での会話を使う>	・言葉が出ない利用者が視線でコミュニケーションに交じる	・談話
	【リスクを回避するためのサポート】	<注意力低下に対応する>	・掃除機のコンセント線がどこまで伸びるかは見ていなかったり、人が立っている所にも勢いよくかけ始めようとする行動が見られた。
<リラックスできる声かけをする>		・ソファに座って「休みませんか」と声かけ、利用者がウトウトする	・談話
<会話をしながら同じテンポで歩く>		・散歩時、一人で前へ前へと行ってしまう利用者には会話をしながら歩くと皆と同じテンポで歩くことができる。	・散歩・外出

	＜刺激が多い場で利用者が落ち着けるように声かけをする＞	・人が多い食堂では、水をすすめ、「〇〇まで待ってください」と声かけをする	・外食
--	-----------------------------	--------------------------------------	-----

＜作業プログラム＞ ①のしを剥がす作業		
方法	段ボールに入っている袋の「のし」を剥がす作業を行った。手順と役割分担は以下の通りである。 ①のしを剥がす作業の説明をスタッフが全体に向けて行う ②段ボールに入っている小袋から包装紙に包まれた箱を取り出す作業(D) ③箱に貼ってあるのしを剥がす作業(B、A、C、O、K) ④小袋を綺麗にたたむ作業(F、C)	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【情報の伝達 におけるサ ポート】	作業の目的や流れを説明 する	・スタッフがまず、のしを剥がす作業の説明を全体に向けて行った。
【参加できる ためのサポー ト】	繰り返しの作業を取り入 れる	・作業し出すと、とても早く同じ作業を最後まで繰り返し行うことができる。
	他者と同じ動きができる ように声かけし、場を作る	・Aさんは椅子からは立ち上がったが周りをきょろきょろしていたので、「こっちにきてもらっていいですか、ここで同じようにしてもらってもいいですか」と簡単にだけ説明するとBさんやCさんの動きを見ながら同じようにのしを剥がす作業をし始めていた。一度するとそのまま続けて最後まで行っていた。
	自発性の低下に対する声 かけ	・Dさんが作業に参加せずに椅子に座っていたので、スタッフの一人が「たくさんあるからDさん手伝ってほしいわ」と依頼形式で声掛けすると、「えー」と嫌がる表情を見せながらもすぐに椅子から立ち上がり作業をし始めた。最後のひと箱が残っていることを「まだ、あとひと箱あった。ごめんなさいお願いできますか」と質問形式で声掛けすると、「まだあんの」と言いながらも素早く作業し最後までして下さった。
	隣で作業を手伝う	・手伝いながら行くと自分のペースで行っていた。その間に奥さんのことを探す素振りは見られず作業に集中しておられた。
	作業の流れや成果を視覚 的にわかりやすくする	・Cさんはのしを剥がす作業が終わればすぐに袋をたたむ作業の方に移動してきて下さり、手伝ってくださった。
【仲間づくり のためのサポ	他者との協働作業	

ート】		
<作業プログラム> ②使用済み封筒の切手を切り取る作業		
方法	使用済みの封筒の切手を消印も含めて切り取る	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【情報の伝達においてのサポート】	1日のスケジュールを伝える	・昼寝前にスタッフが作業のスケジュールを伝えると、「あれやったな。」と言い、時間にスタッフが起こすと椅子に座り作業をし始めた。
【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】	日課（習慣）に定着させる	・切手の作業は何度かしており、方法は身につけている。また、時刻表的な行動を生かして、かみやまでは散歩の前の30分は作業の時間であるという認識が出来ている為に、自主的に動くことが出来たと考える。
	道具を使う	・切手の作業をしませんかと作業を行っている机に導き、方法を一緒にしながら教えると、1人で作業し始めた、はさみの上手に扱っており、間違うことなく作業できていた。
	作業専用の場を作り、事前に本人に伝える	・Eさんに休憩前に予定の紙を見せて13:30~14:00まで作業、切手を見せて、Eさんの作業専用の場所を作り「ここでこの切手の作業してね」で「14時から散歩行きましょう」と伝えておくと、起きてコーヒーを飲んだ後に、その机を指して「ここでするんか?」と自ら聞いてこられた。そして、その机に移り指導していなくても、黙々と作業し始めた。
【参加できるためのサポート】	作業のルールを視覚的にわかりやすくする	「消印も一緒に切手下さい。ここです。」と切る所を指で示しながら言うと、わからないのか、消印の部分も切ろうとしていたので、赤線で切る所を引いて渡し、ここを切って下さいと言うと間違えずに切れていた。
	集中が切れた時に声をかける	途中一度パソコンに目が行き気になったのか、パソコンの所へ移動して電源を触ったりしていたが、スタッフが切手を持って、「みなさんあそこでやってますよ。」と伝えると、作業している机に戻り切手を切り始めた。それ以後は集中力が切れることなく作業出来た。

＜作業プログラム＞③名札づくり		
方法	名札の大きさに合わせて紙を切り、名札ケースに入れる	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【記憶障害の補助サポート】	セルフサポートのためのツール作り	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフと前回までのノートを開きスタッフが振り返りながらこの日は何をしましたねという話をし始めると、じつくりとノートに目を移し参加しているスタッフの名前を見て、1人1人今日も居るのか確認していた。顔と名前は一致しない為、何度も同じ確認をされていた途中で、Iさんの方から、名前書いたもんとか付けてないから忘れるわ。と言う発言があった為、「じゃあ名札を作りましょう」ということになった。 ・何色の紙にするか2種類の中から選んでもらい、「この型で作りましょう」と言いながら、名札を紙に置き鉛筆を渡すと、鉛筆で名札の型を取りはさみで切り始めた。切り取った紙を名札に入れて少し大きいとそれを、微調整していた。また、隣についていたスタッフの分も、線を引かずに目分量だけで切り取り、微調整し渡して下さった。道具をうまく使うことが出来、線がなくてもその大きさを見ながら切るとることが出来る。
【自信を回復するためのサポート】	できないことを自分で工夫してできるようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・型を置き、線を引いてくださいというと、鉛筆を持って線を引き、線に沿ってはさみで切れた。線があると切る所が明確になり、切ることが出来る。
【参加できるためのサポート】	・プログラム時の家族の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・まず色を選んでもらう為に目の前に二色の紙を持って行ったが、自分から選ばうとする顔はするが、奥さんの顔を見て、奥さんが「青でいいな」とアドバイスをされた。

＜作業プログラム＞ ④掃除		
方法	2～3人ごとに分かれて、靴を入れている棚とカゴ、別室の拭き掃除と掃除機とに分かれて行った。	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面

【情報の伝達においてのサポート】	言葉で伝わらない時は視線や動作で伝える	・「掃除機をしましょう」と掃除機を持ってくるとそれを持ち構えて下さった。スイッチ押してくださいと言うと、行動にはうつらず「ここスイッチです。ここ押してください」と言いながらスイッチの方に目を向けると自ら押してください。
【記憶障害の補助サポート】	手続き記憶を活かす	・雑巾を渡すとスタッフが声掛けしなくても自分でカゴを退けて棚を拭いていた。 ・スイッチが入ると、自分でノズルを持ち、動かしながら絨毯の上をかけ始められた。言葉では行動に繋がらず、動作と言葉を交えていくと伝わっている。掃除をすることはわかっており、掃除機の使い方も分かっている様子。
	声かけで記憶障害をサポートする	・スタッフが「上ももう少しふきましょう」と言う。棚の上を拭いてくださった。しかし、一度拭いた所を覚えておらず同じところを2度拭いていた。 ・同じところを何度も吸っている為、スタッフが「ここかけて下さい」と手を使ってかける場所を示すと、そこをめがけてかけて下さるが、コンセント線がどこまで伸びるかは見ていない。
【リスクを回避するためのサポート】	注意力低下に対応する	・コンセント線がどこまで伸びるかは見ていない。また、人が立っている所にも勢いよくかけ始めようとする行動が見られた。

<作業プログラム> ⑤その他の作業		
方法	・壁にかける絵の位置を考える ・はぎれの裁断をする ・棚の組み立てをする ・型紙にそって鋏で切る ・コーヒを淹れる	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面

【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】	・本人ができることをやる場を設定する	<ul style="list-style-type: none"> ・アートワークの絵を壁に飾る時、左右のバランスを見てもらっていいですかと依頼すると、椅子から立ちいろんな角度から絵のバランスを見て、少し左が傾いていると指摘して下さった。 ・棚の組み立ての時に棚を組み立ててほしいと依頼すると自分で試行錯誤しながら棚の組み立てをして下さった。 ・コーヒーをFさんに入れてもらおうとするが、なかなかうまくいかず、aさんがコーヒーを入れる。見ているに、Fさんがコーヒー好きであるからコーヒーを入れるというのは早合点であるように思われた。ロフトで話されていた内容から、Fさんはモカが好きであり、コーヒーを入れろと言われると、モカを入れるという頭になっていたようである。そのため粉のドリップが理解できなかった。一生懸命一人分をはかっていたFさんの姿が目映ると、6人分をこしらえてほしいこちらの意図が少し傲慢であったような気がする。本当に好きなことは何かをこちらの解釈でゆがめてしまわないようにしないと、好きなこともできない人とみなしてしまう可能性もあるなあと考えた。 ・Fさんが豆から挽いて煎れて下さったコーヒーを「ありがとうございます。いただきます。」と言い一緒に飲んだ。Fさんは自分が煎れたコーヒーをおいしそうに飲んでいるスタッフを見て、満足そうな表情。
	道具を使う	<ul style="list-style-type: none"> ・はぎれの裁断するところを折り、Eさんにはさみを手渡しここを真っ直ぐに切って欲しいと依頼すると、はさみを持ってとても早くきれいに裁断して下さった。 ・指示を理解し、集中して「切る」「並べる」作業をすることができていることがわかった。数は25まで数えるのを聴取した。
【参加できるためのサポート】	・仕事の活動を取り入れる	<ul style="list-style-type: none"> ・Eさんは今でもたまに仕事を請け負うことがあるので、かみやま倶楽部で仕事をする事ができれば、通う意味を持てるのではないかと考える。 ・はぎれの裁断するところを折り、Eさんにはさみを手渡しここを真っ直ぐに切って欲しいと依頼すると、はさみを持ってとても早くきれいに裁断して下さった。14時からの散歩の時間が過ぎていたが、時間を気にせずに行っていた。
【仲間づくりのためのサポート】	他者との協働作業	<ul style="list-style-type: none"> ・自分だけでは手が足りない部分は他の人に依頼しながら、また他の人と意見交換しながら行っていた。

<楽しみのプログラム>⑥アートワーク

方法	<ul style="list-style-type: none"> ・進行役のスタッフが前で手法の説明を行い、マンツーマンで関わるスタッフが必要なところをサポートして、作品を作り上げる。 ・作品を作る前にモチーフを五感で味わったり、モチーフにまつわる話をしてイメージを膨らませる ・作品完成後には、鑑賞会を行い、自分の作品や他者の作品の感想を話し合う 	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【情報の伝達においてのサポート】	<ul style="list-style-type: none"> ・全体への説明と個別への説明を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・色を混ぜるとグラデーションができるんですと言いながら示し「わかりますか？」と聞くと、Aさんが「わかりません」と答えられた。 ・前で指示する人の方を向くよう促がすが、注意を維持することが困難。
【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】	<p>本人ができることをやる場を設定する</p> <p>本人のやり方を否定しない</p> <p>「規則性」</p> <p>「常同性」</p> <p>「考え不精」</p> <p>「書字困難」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・迷うことなく赤色を取ってすり始めた。 ・他の色を混ぜることなく黙々と塗られていた。また、コスモスの型に沿って正確に塗られていた。 ・すべて赤色で大きさの違う●を規則的に紙いっぱい描かれた。 ・一度やりだすと変化なく同じことを続ける常同性がみられる。 ・最初に黄色をぬって、その上にオレンジ色をぬるよう指示しても色を重ねることはしない。余白に万遍にポツポツと色を落としていく。 ・点々と、重ならないように枝と枝の間をうめていく。 ・絵は点描画のようにできあがった。本人は全体を見て描くというより、その1点だけを見ているという印象。 ・ヘタを割り箸で押して実の上に色付けをするよう書いて示しても、余白に次から次へと押していく。その作業は楽しんでいるようにもみえる。 ・用紙の「裏を使いたい」と言ったとき、「表でやりましょうよ」とさえぎってしまっていた。
【本人の気持ちを引き出すためのサポート】	クローズドクエスションを利用する	<p>b先生に「どうですか？」と感想を聞かれ、「よろしくお願いします」と答える。作業中には「100点満点」と言っていたそう。二者択一の聞き方ではその一つを答えることができるが、「どう」と聞かれると、ことばが浮かばないと思われる。何か答えなければいけないと思い、「よろしく・・・」と返答してしまうのではないかとと思われる。できるだけ本人が何か言いやすいような形で与えることが今の段階で（あまり失敗させない、焦らせないように）必要なことかと思われる。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> 感情を伴うことばを引き出す 	<ul style="list-style-type: none"> 描き終えた気持ちを聞かれたがことばは出ない。STが「よかったですか、悪かったですか」と聞くと、「悪かった」と言い。「悪かた」と「っ」を抜かして書いた。再び「どうでしたか」と聞かれ、「ブルーでした」と今度は自分のことばで答えた。意識してことばを出そうとすると難しいが、スッとおそらく感情に乗って出てくるような印象を持った。 炭の匂いを嗅いでAさんは「ストレートですね。」と。
【記憶障害の補助サポート】	<ul style="list-style-type: none"> メモによるセルフサポート 	<ul style="list-style-type: none"> 「100%のうち何%できました？」に対し、「50%」と答える。「次回100%にしてください」と言えば、メモ用紙に「50%セント 100%セント 次回」と書いた。
	<ul style="list-style-type: none"> 手続き記憶を活かす 	<ul style="list-style-type: none"> (墨の) すり方は特に説明しなかったが、きちんとすれていた
【自信を回復するためのサポート】	<ul style="list-style-type: none"> 自分を認めることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 雪だるまの白抜きの絵を描いたAさんはご自身の絵を見てはいと大きく手を挙げて「私が描きました」と大きく答えられ、満足そうな表情があった。 b先生に「かわいらしい絵ですね」と言われ、照れて笑う。「描いてみてどうですか」に「100点満点です」と答える。
	<ul style="list-style-type: none"> 回数を重ねていく内に本人の変化がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 作業の合間に手持無沙汰になると妻のところに行って話しかけていた。 前回まではアートワークに対して「なんでこんな幼稚なことするねん、帰る」と嫌がっていたそうだ。

＜楽しみのプログラム＞ ⑦卓球		
方法	<ul style="list-style-type: none"> かみやま倶楽部には卓球台が常設されており、気軽に卓球ができる。 	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面

【記憶障害の補助サポート】	・手続き記憶を活かす	<ul style="list-style-type: none"> ・「卓球をしましょう」とスタッフがお誘いするとすぐに立ち上がり卓球のラケットを渡すと自ら卓球台の方に行き、慣れた手つきでラケットを持っていた。 ・スタッフがDさんと声をかけ、ラケットを渡し台の所まで付き添うと、「えーっ」と言いながらも打ち始められた。Aさんも同じように「いいです。」と断りながらも、ラケットを渡すと打ち始められた。試合形式でスタッフとラリーをしている時は声を出して笑い、楽しんでおられた。また、みなさん経験があり最初は体の感覚が戻っていないのかなかなかラリーが続かないが、少し打ち始めるとラリーが続き時々技を使うこともある。感覚的に身につけているものは、忘れていかないのだと感じた。
【仲間づくりのためのサポート】	他者との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・EさんがGさんと対戦した後に、GさんとHさんが対戦している姿を見て「この人卓球上手いねん。ほんまなあー。」とスタッフに教えて下さった。 ・途中でボールがうまく飛ばずに変なところに転がっていった時には「ごめん」と言い、机の下の方に飛んだボールをスタッフが拾おうとすると、Fさんが素早く机の下に入りボールを取って下さった。

<楽しみのプログラム> ⑧楽しみ		
方法	・バルーンアートづくり（外部ボランティアの指導を受けて作成する） ・歌 ・将棋	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【情報の伝達におけるサポート】	言葉で伝わらない時は視線や動作で伝える	・バルーンをねじったりするのも動作で示すで行えていた。
【記憶障害の補助サポート】	声かけで記憶障害をサポートする	<ul style="list-style-type: none"> ・将棋のコマを並べる段階で、コマの種類について二人の意見が相違しており、それに対してスタッフが間を取り持って「今回はこのコマを使いましょう。順番はコマが裏向けばIさん先行でお願いします。」と打ち始められるように支援した。将棋の打ち方等覚えている状況であったとしても、利用者のみならずスタッフが支援に入ること、スムーズに将棋を打てるようになることを考える。また、途中でもJさんは、コマがひっくり返ると元が何のコマだったのかわからなくなり、何度も同じコマのことを聞いていたり、考える時間が長くなると、二人とも順番がわからなくなってしまう為に、途中経過もスタッフの介入が必要であると考えている。

【仲間づくりのためのサポート】	集団から離れている人にもプログラムの輪の中に入れる	・散歩後みなさんが歌っているところには入ろうとせずにソファの所に座っておられたが、スタッフが歌詞カードを持って行くと、一緒に歌われた。また、拍手も自らされた。
-----------------	---------------------------	---

⑨談話		
方法	プログラムとプログラムの中の休憩や昼食後の時間、移動の時間に利用者と利用者、利用者とスタッフの会話が生まれている	
カテゴリ	サブカテゴリ	例となる場面
【本人の気持ちを引き出すためのサポート】	くつろげる場所で隣に座り、心境を聞く	・ソファでBさんの隣に座っていたスタッフに、今の自分の状況と比べて、「昔は楽しかったし、充実していた。けれども、病気になって妻にあたったこともあったし、いろいろあったけど、今はここに来させてもらってみなさんといろんなことが出来て、楽しいですしありがたいと思っています。でも、時折考え始めることもあるので、そんな時は犬の散歩に行つて、すっとしてくるようにしてるんです。」と今のストレス発散方法と、かみやまに来てからの感想、病気の受け入れについて、遠い目をしながらゆっくりと一言一言をかみしめながら話して下さった。
【参加できるためのサポート】	プログラム時の家族の役割	・茶話の前、始終Kさんは帰ろうと奥さんに言われていたが、茶話が始めると奥さんが関心を持って参加され、あきらめたようにたたずまっていた。 ・奥さんが居ないと自分からの発言が多くなる。奥さんがいると奥さんに頼ってしまうのか、奥さんに迷惑をかけているからあまり自分の想いを素直に話してはいけないと思っているのか。
【仲間づくりのためのサポート】	話題づくりの工夫	・新潟の話でBさんはイキイキしていた。Lさんが以前訪れた場所があると話に加わり、話題が広がる。 ・Cさんとお酒の話をしている時にBさんにもお酒を飲むかどうかの話をする、ボランティアを介すことなく二人が互いの話をしていた。
	非言語での会話を使う	・スタッフが「何か足りてませんよー」というと大きくうなずく動作をされており、周囲に目配せもしていた。自分ができないことへの挫折感あるいは慣れない緊張が強いが、声を出してなくても、場の雰囲気を作ることに貢献されているのだと感じた。「なんだろうなんだろう」と私も場の雰囲気を作ろうと声を出してしまう。後で思えば、このようなどころで利用者さんが互いに交流できるのかもしれない。

【リスクを回避するためのサポート】	リラックスできる声かけをする	・昼食後にソファにて「休みませんか？」とAさんに提案するとソファに座られ、最初はスタッフの話を聞きながら時折「そうですね。」と発言されていたが、途中でうとうとし始め軽く睡眠された。朝からの回数券紛失などもあり混乱もあった為、思った以上に疲労があったのだと感じた。Aさんの疲労度もあるが、かみやまの場や一緒に座っていたスタッフに対して安心感を持たれていた為、眠れたのではないかと考える。
-------------------	----------------	--

⑩散歩・外出		
方法	外出は散歩や、車に乗ってドライブなどに出かけている。前頭側頭型認知症の人には散歩は日課となっており、散歩専門の同性のボランティアが同行することもある。	
カテゴリ	サブカテゴリ	例となる場面
【情報の伝達においてのサポート】	1日のスケジュールを伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・10分後に時間の約束をすると納得し、時間までは1階のロビーで過ごされた。 ・14:30前から15:20まで散歩に行かれたが、いつもよりも少ない時間のため、「今日は15:15までには帰りましょうね。」と言うと、「じゃあ」と言ってご自身の決められたルートで歩き始められた。 ・時間に合わせてデイサービスに到着しもう少しということなく、散歩を終えられた。
【参加できるためのサポート】	季節感を感じ、「見る」「さわる」ができる	紅葉を見て「きれいですね。」と言われ笑顔が増えていた。また、自分で落ちた紅葉した葉を拾っていた。
	話題づくりの工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・沿道にあった自転車を指さしながら「自転車は？」と聞くと、乗れると答えたが、おそらく乗れるが、あまり乗らないと言いたかったようで、ことばが出ないので途中で諦めて肯定したような印象を持った。自分から「あの商店街は」と指さしたがあとは続かなかった。 ・窓から工事中のビルを見て、自ら口を開きクレーンの事やクレーンを扱っている人の保険の事などを話して下さった。
	予定外への柔軟な対応をする	・出かけ際に、Kさんが買い物組ではなかったのに買い物についていく態度を見せる。cさん、dさんはすぐにKさんが買い物に行けるように編成を変える

【仲間づくりのためのサポート】	集団の連帯感	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフがヒールの靴を履いていることに対し、「足大丈夫か？」と聞いてくださったり、信号で待ってくださったりした。 ・「車が来る」と周りを気にして、スタッフに気遣いながら歩いていた。 ・信号を先に渡った後に F さんが渡れなかったのでスタッフが言う前に自ら「あそこで待とうか」と陰に入って待っておられた。 ・E さんが何度もトイレ休憩を取るが、誰一人としてそれに文句を言う人はいなかった。 ・C さんは、常に一番後ろにいて、前にいる利用者とボランティアの数を途中途中で何度か数えており、他利用者の言動を見ていてリーダーの役割意識の元行っているように感じた。 ・C さんは、みんなの最後尾を歩きスタッフも含めて人数を数えながら歩いておられる。利用者としてではなくボランティアとして参加しているという思いがあるのか。 ・自分が先に歩いている時は後ろを何度も振り返り F さんが付いてきているかを確認していた。 ・E さんが屋根のない道ばかり進もうとするので、D さんが「商店街をとおろうや」と提案すると、それを聞いていたのか E さんが D さんの手を取って「一緒に行ってや。」と声をかけられた。また、スタッフが E さんに「D さんは友達ですか？」と聞くと「友達や。」と答えられた。
【リスクを回避するためのサポート】	会話をしながら同じテンポで歩く	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアスタッフが前に歩いても追い越そうとする様子が何度も見られた。歩きながら話をしていると、ボランティアの隣で同じテンポで歩くことができているが、何も話さずに隣で歩いているとどンドンと前に行こうとする様子があった。 ・歩くスピードが速いためスタッフや共に歩いている利用者よりも大分と前で歩いている為、横に付き添って注意喚起することが出来ていない。

⑩外出		
方法	事業所付近は飲食街であり、サラリーマンを対象に昼食がとれる店が数多くある。朝の会で、今日のお昼は外出ということを決めると、お昼前に利用者、スタッフ、ボランティアが外出に出かける	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面

【本人の気持ちを引き出すためのサポート】	クローズドクエスチョンを利用する	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんは、昼食に自らうどんを選び、きつねか昆布の2種類から「昆布は・・・」と嫌そうな表情を浮かべキツネを選択していた ・「定食」(ほとんどの人)か「ちらし」か、注文をどちらにするかの質問には、挙手して自己表示することができる。
	行動から本人の言いたいことを推測する	<ul style="list-style-type: none"> ・座ってすぐに鞆を持って立ち上がり靴を履こうとされているので、「今からご飯ですよ」と言うと「わかってるんですけど」と言葉に詰まり、靴を履いて玄関の方に向かわれたので「トレイですか？」と聞くと「はい」と言われたので、トレイまで誘導した。自分のしたいことが言葉になり難いが、それを読み取り声掛け誘導の支援を行うと、うまく行動が取れる。
【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】	手を出さないで見守る	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしても皿が取れない。普段食事する量より少ないということであった。けれどもFさん自身、悪戦苦闘しながらお皿をとり奥さんにも進めたりされていたので、ご本人がどれだけ負担だったのかはわからない。cさんも私も、本当に無理そうなら助けるという態度で、Fさんがお皿をとるのを見ていたが、意欲がなくなるという感じではなかった。
【リスクを回避するためのサポート】	<ul style="list-style-type: none"> ・刺激が多い場で利用者が落ち着けるように声かけをする 	<p>12時半になり、職員がぞくぞくと食堂に入って来て回りに人が増えてくると、Aさんはそわそわし始め周りをキョロキョロと見渡す様子があったが、コップに入っている水を渡してその水を何度も飲みながら、「他の方が食べ終わるまで待ってくださいね。」という声かけに対して「はい」と答えて座っておられた。</p>

⑫調理		
方法	鶴見緑地でバーベキューを行ったり、デイサービス内でお好み焼きや餃子を作った	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【情報の伝達におけるサポート】	言葉で伝わらない時は視線や動作で伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・皮に具材を包む作業の経験がないためか説明だけではできず、スタッフが皮に具材をのせて渡すと包むことは出来ていた。 ・Aさんは軍手をはめておられたがうろろうろとしておられたので、ごみをここに入れて下さいと目の前に袋を持って行くと、机の上でのごみを入れて下さった。

【記憶障害の補助サポート】	手続き記憶を活かす	<ul style="list-style-type: none"> ・料理をしている時は、自分から率先して、しておられた。最後には、片づけもしており今まで身につけてきたところが十分に出ていた。 ・お願いできますか？の声掛けにすぐに包丁を持ち自ら指導なしで切り始めた。Mさんはねぎを細かく切って下さり、餃子はいつも自分で作っているからということで手際よくされていた。 ・9合のお米を一人で洗ってくださった。大丈夫ですと言いながら、手際よく行っておられた為。経験のあることであると感じた。
【参加できるためのサポート	作業の流れや成果を視覚的にわかりやすくする	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶碗をDさんが渡しそれにEさんがご飯をよそい、よそわれたお茶碗をBさんが机に並べるという連携がうまく取れていた。
	役割を作る	<ul style="list-style-type: none"> ・おいしく作れたことで、他の方から喜ばれるという体験が、Nさんにとって自分が料理をする役割を担っているという実感に繋がるのではないか。

⑬昼食		
方法	昼食は、外食か弁当購入か自分たちで作るかいずれかを朝の会で利用者たちが選んでいる。昼食後は、皿の片づけを行い、各自歯みがきを行っている。	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】	本人ができることをやる場を設定する	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が食べ終わったお皿を重ねて持って行こうとされたので、スタッフが誘導し洗面所の所まで運んでいただいた。
	その日の体調に合わせて支援内容を変える	<p>スタッフが「先に歯ブラシしましょうか？」と声掛けすると、自分で歯ブラシセットを取り出してこられたが、洗面所で歯ブラシを出して、周りを見渡しそわそわした様子であった。その為、歯磨き粉を取り出し歯磨きにつけ、コップに水を入れて渡す支援を行った。朝から表情が暗く、混乱がいつもよりひどくなっている状態である為、出来ることがいつもより少なくなっていると判断をした上で支援方法を変える必要があると考える。</p>

	食器の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・皿に入っているものを全部食べようとしていて、最後の少しをお箸で食べにくそうにしていたので、スタッフが底のあるお茶碗に移し変えてスプーンを渡したら、最後まで綺麗に食べていた。
--	-------	---

⑭朝の会		
方法	<p>利用者は送迎車で来る人や、電車を使ってくる人、それぞれである、来所し手利用者同士顔を合わせたら挨拶が交わされる。その後、自分で自動血圧機にて血圧を測定し、机を囲み、朝の会を行い、その後ラジオ体操を行う。朝の会では、その日の計画や昼食についての予定を話し合い、スタッフがその記録をホワイトボードに貼ったA3用紙にマジックで書いていく。その用紙は、1日中貼っておくので、利用者もいつでも確認することができる。帰りにはその用紙の内容を自分でノートの転記し記録としている。</p>	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【情報の伝達においてのサポート】	情報を伝える方法を個人ごとに変える	<p>・「今日は何しましょうか？」と言った後に提案として紅葉を見に行かないかと話をした。利用者さんからの反応はなかったがスタッフは拍手をしたり、「良いですね」と言うなどの反応を示した後に、「紅葉を見に行くのはどうですか？」と一人ずつ聞くとIさんは「行けるんやったら行きたいですね。」と目を大きくして答えられ、Fさんは、奥さんの顔を見て「いった方がいいですね。」と言われた。それに対し「では、お付き合い願いますか？」という問いかけをすると、Iさんから「はい。」と言う返事があった。</p> <p>・選択肢(●自分たちで作る●外食●お弁当)を前に示しどれがいいですか？という投げかけの後に、誰からも返答がなかった為、一人ずつ聞いていくことになった。まずはAさんに「Aさん、自分たちで作るはどうですか？」と聞くと「ないですね。」という返答であった為、ホワイトボードに書いた文字を消し、続いてもう一度Aさんに「外食かお弁当どっちがいいですか？」と聞くと「お弁当がいいですね。」と返答。次に、Bさんに「どちらがいいですか？」と聞くと「お弁当がいいですね。」という返答があった。Eさんにも「お昼外食かお弁当かどっちがいいですか？」と聞くと、「そや、買って来てながいいとおもうんやけどな。」と返答があった。集団で決めていく時にも、1人1人特徴がある為、各々に対し聞き方を変えることが大切になってくる。</p>
	判断するための情報を伝える	<p>・何が食べたいのかという内容の部分も大切にし、お弁当であれば選択肢はたくさん増えるなどの説明や、マップがあればそれを使いながら、“ここのお弁当屋さんには、このようなお弁当が置いている”ことなどを示す方法を取り入れることで、新たに入った人も決定しやすくなるのではないかと。</p>

	<p>・1日のスケジュールを伝える</p>	<p>・Eさん用に作業時間と散歩開始時間を、明確に示したスケジュールを、別紙に書いて提示し、写してもらった。そうすることで、時間通りに自主的に作業に移ることが出来たのではないかと。</p> <p>・エレベーターから降りたら、目に入るように机の上に到着したら①連絡ノート・薬を出す②手洗い・うがい③血圧・体温を測ると書いたボードを置いている。また、前のホワイトボードにも書いている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>到着したら</p> <p>① 連絡ノート・薬を出す</p> <p>② 手洗い・うがい</p> <p>③ 血圧・体温を測る</p> </div>
	<p>その日の予定を全体で共有する</p>	<p>・健康チェックから始まる本日のすべての予定を、利用者とともに相談しながら決め、前に貼っている紙に書いてくようにした。</p> <p>・他利用者に作業を促す時も、スケジュールを記載した紙を前に貼っておき、それを指して見てもらった上で行ってもらうようにした。</p> <p>・ホワイトボードに“来た人から血圧を測って下さい”“月初めなので体重測定をします”と書いておいた。Eさんは来られてからボードを見て手を出して、「これまたするんか？」とスタッフに聞いてこられた。</p>
<p>【本人のできることを自分で決めて行えるためのサポート】</p>	<p>本人ができることをやる場を設定する</p>	<p>・案内付の自動血圧計を設置した為、測れる人に対してはご自身で測っていただけるように、スタッフより「自分で測ってもらえる機械を頂いたので、一人ずつ測って下さい。」と説明した。一人ずつ声掛けし、血圧計の前まで一緒に行き、腕を入れてボタンを押す動作を「ここです。」と指しながら説明した。測定後に出てくる用紙にご自身の名前を記入していただくように説明し、書いて頂く。</p>
	<p>日課（習慣）に定着させる</p>	<p>・Dさんは日付確認をするとすぐに答えて下さる。日付の確認が習慣的になってきている様子。</p> <p>・Eさんは来てすぐに手を出し「これやるんか？」とスタッフに聞いてこられた。来たらず、血圧測定をすることがわかっているのだと感じた。</p>
	<p>計画立案に利用者が参加する</p>	<p>・お好み焼きを作ることを提案し、材料に何が必要か聞くとNさんが「キャベツ」と答えて下さった。肉は何入れますか？という的を絞った質問に対しても「豚肉」と返答があった。</p>

【本人の気持ちを引き出すためのサポート】	感情を伴うことばを引き出す	<ul style="list-style-type: none"> ・自由会話の時には言えていた「阿倍野」が、自分の順番がきて聞かれると出ない。 ・緊張して、焦ってことばを出そうとすると一語も出てこない。意識すると発話はむずかしく、逆に話すことに無意識になっていると、ことばが出るという印象を持った。 ・他の参加者となじみの関係ができており、顔をみると、挨拶のことばがすっと出る。
【記憶障害の補助サポート】	声かけで記憶障害をサポートする	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は月曜日初めての方が2名と新規の方が2名おられたので、自己紹介として名前と住んでいる所、趣味を一人ずつ話して頂いた。Nさんは趣味と言われても何も・・・と言われたので、スタッフが「Nさんは絵を見るのが好きですよ」と話すと、「そうですね、見るだけですけど。」と返答があった。

⑮振り返りの会		
方法	一日の感想を話し合い、その日にやったことを各人でノートに記録する。	
カテゴリー	サブカテゴリー	例となる場面
【記憶障害の補助サポート】	メモによるセルフサポート	<ul style="list-style-type: none"> ・Eさんは、自分のノートに今日の内容を書いていた。 ・ノートに今日したことを記載する場面では、ホワイトボードを見ながら横でその文字を読み上げると、漢字を思い出そうとしているが、出てこず「忘れた」とペンを置かれた。
	声かけで記憶障害をサポートする	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんは、今日何食べたかという問いかけに「んー。」と思い出そうとされており、「うどんですよ。」という「うどんです」と話された。
	写真を使って振り返る	<ul style="list-style-type: none"> ・Iさんは写真を見ながら「これ、私ですな。いつですか？」と何度も聞かれており、今日行ったことをすべて綺麗に忘れていた。しかし、今日行ったことを伝え、写真を鑑賞した後に感想を聞くと、「素晴らしかった。」という発言があり、自分の記憶にはなくても感覚として残っている部分を、写真を振り返ることで思い出すことは出来るのではないかと。毎回の作業やデイサービスでの様子を写真に収めているので、短期記憶が弱い人に対しては、毎回振り返りの時間を使って写真鑑賞を取り入れるのもいいのではないかと。そのことが、その日の楽しかった感覚を取り戻すことに繋がるのではないかと。Fさんも鑑賞後に感想として「いいことですね、またね。」と言われた。楽しかったという感覚を持ったからこそその発言であると思う。

	<ul style="list-style-type: none"> ・その日の1日を振り返り、良い印象で1日を終える 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の感想を一言ずつ話すようにスタッフが言うと、Bさんが一番になり、しっかりと自分の言葉で笑顔で感想を話していた。 ・今日のBBQはどうでしたか？とDさんに聞くと「楽しかったです。」と笑顔で答えられた。Aさんも同じく「楽しかったですね」お腹いっぱいになりましたか？と聞くと「お腹いっぱいになりました。」と満足すな笑顔で答えられた。Bさんは「外で食べるっていうのはやっぱり良いですね。」と笑顔で感想を述べられた。
<p>【自信を回復するためのサポート】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同時作業を求めない 	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんに今日はどこに行きましたか？と聞くと前のボードに書いていたお弁当を買って食べたことを写そうとしていたところであったため、「お弁当です。」と答えて周りが笑っているのを見て間違っことを言ったという顔で恥ずかしそうにされていた。今見ている言葉や、今聞いた言葉を口にすることが多くなっているため、Aさんへの声掛けする時はゆっくりと落ち着いて答えられる状況かどうかを見てからするようにする必要がある。間違えたという感覚などを持つことで本人は苦しい思いをする為、しんどい思いをするという感覚を持たないように関わり方を考慮する必要がある。